

漢魏洛陽城における日中共同調査

去る2008年3月13日に日中共同調査の調印式がおこなわれました。中国社会科学院考古研究所と共同で実施する漢魏洛陽城の調査研究の協定です。

漢魏洛陽城は現在の中国河南省洛陽市に位置する都城遺跡で、後漢、魏、西晋、北魏の4王朝の都として栄えたところです。研究所では数年前からこの遺跡の共同発掘調査を計画し、中国側と協議を重ねてきました。このたび中国政府の許可をうけて、両研究所の間で日中共同調査の協議書の調印式をおこなうこととなりました。

調印式では本研究所の田辺征夫所長と中国社会科学院考古研究所の王巍所長がそれぞれ署名し、協議書を取り交わしました。調印式終了後には記者会見をおこない、この調査の意義を強調しました。

この共同調査では、4年間の計画で、漢魏洛陽城の中核部である宮城を中心に発掘調査を進めていく予定です。本調査の目的は日中都城の比較研究にあり、日本古代都城の源流となる漢魏洛陽城の具体的な状況を把握し、比較研究の基礎資料を提示しながら、

研究を進展させることを目指しています。

今年の発掘調査は4月中旬から開始しています。春は宮城南門北側の試掘調査を実施し、秋には本調査をおこなう予定です。

研究所と中国社会科学院考古研究所との間にはこれまでも20年来の共同調査研究の実績があります。1991年にはじまった漢魏洛陽城永寧寺、1996年から漢長安城けいきやう桂宮、2001年からは唐長安城大明宮たいえき太液池の発掘調査をおこなってきました。この成果によって都城研究は大いに進展しています。

洛陽城は太極殿を正殿とした宮城を構成し、周囲に碁盤目の条坊を展開した本格的な都城であり、中国の都城史においても画期となる遺跡です。また、洛陽城を基礎として発展した隋唐長安城は東アジアの周辺諸国における都城の形成にも大きな影響を与えています。この意味で、洛陽城は東アジアの都城史上もっとも重要な遺跡であり、その発掘調査は日中双方の研究者が注目する事業でもあります。

今後調査が滞りなく進展するよう日中双方で協力し、よりよい成果が得られるよう努力していきたいと考えています。 (都城発掘調査部 今井晃樹)



固く握手をかわす王巍所長(右)と田辺所長(奈良文化財研究所にて)